山家和歌集　下

雑

題しらす

はゝくよ[illegible]つようちえへて[illegible]物待のとくれ
をさけかりし昔にをれのこれてなゝし人[illegible]世のまゝに[illegible]
わちの手をもちらくれよ袖をあて昔を志のふなみさつれん
あまくしと昔[illegible]さくいあさけれてゆへあつき[illegible]に志れくれ
いつやしん山のあるよあるりの[illegible]あるらき世を志[illegible]ねんそ
くりわれさうくみのことおるち[illegible]めよそみつ世と[illegible]
あうしんとせよんそ[illegible]りおよいしつまてさね　こゝきき
此の[illegible]るさもる[illegible]とつきあるよ[illegible]さこ代よそわ
世まつうへらわなん代こらわわもわ久る

[stamp] 九曜文庫
[stamp] [illegible]藏書

りん律くしける

世中はまよふ身ならしや秋の月こゝろの水にすみもうかまし

五月さるふとて人のつかはしける

世のうきによひとへ人はあらはれんはなのまにまにちりもたえ

むかしのうれはしきことをもそこ絵のへたらは

世のうき絵背のこゝろに乗りてむかしのまことひかへて

世よあしと鼓をひかえ東山にて前の

まかせてもさとの人なりは

空にも我んは去の衣をしけしわしりけるまことひかえ

更にもしん鏡によみける

世鏡のかをしとおもひしることもてすてぬるなき東むかしのまことえて

ましろの東山にあみた房とかいふ人の

庵室にて泊りてみかへりける夜衣をかへて

よみける

木の葉ちるやとはさひしき深山の奥の住家なれ

世とのかれぬを我かへる人のりし世に送る

世をわすれ果てはいひそめしまことよ人はこゝろよ

こゝろすむ所にこりて我をわすれ人のかりの月

乃こゝろつりける

月のさやかにみゆるよことそしりそれはかなし

世絵のかれていせおもふ人のかたのしるゝ山まて

深山の世とこそふかりすていろまれ秋の風

述懐

あるとしもゆかんおもはれてこそうしよ文恵法師

侍従大納言成通のもとへ人の世をそむきぬときゝて
いひつかはしける

返し

中院右大臣世を遁れんと思ふ頃月を見て
いとふへき世のうきことも思はれて
そのかみの袖もぬれけり

いひ遣はして

和泉式部月を見て
人しれぬ心にかけし月影は
世をそむきても猶ぞ恋しき

返し

もろともにみし月影は世の中に
なにか曇らでありあけの空

返し

法師になりて山寺に行きける時

返し

遁世して山里に侍りける頃
あかつきに人の来て仁和寺の宮に
まゐりて侍る人の京へ帰りけるに

返し

立かへり宗の跡もゆかしけれ

返し

山さとまんハよく住ありし以来此旅の三級ゆへし
はるさきくしれさりゆゑ
おもひの外紙書てやしてかれゆきき関を又述らん
まし
世をそむきんのうちハ関にありて此よりも返しとて花やかは
さうしよ人にて西山にありけれはおもひける離れ
れらんせまいつらうしわかるゝ人て又
あひてみるかひもなく関の外に住ますへきよ見るや
又返し
まてしいまてハさへせんとよひ道のいくもなし
後の世のことをわかりするもしもなく
なき人のゆくへいひ人はるかしける

道中まんありかに此人のみかえ　又関に住ゆくかあるへき
返し
よそにしくん年ハあり明けにも関よりもしるし
ある山の女房世をのかれて西山に住と聞て
ありし住おしもしらね今ハ人のゆきは
世まかりわかれの人のかくしも思ひける
なか紙関ていふ道なく
さかきれし西やさあはれてよ跡のよきかくしきみ清さ
返し
しも西のやまは後そよし老さまてあはれ住よ後なく
待賢門院の中納言の房世をそむきて
北くしら山のうちよ住侍らん比雨ふりける

かゝまてゝはる海に数〻あまたなれど
ものゝふしまへしまへるしりける
うきつけしか
山のそ〻風のおとはけしき絶つすなはち梅の
数ぞしみの絹ひとつの海わたりかけるさ
頃みしまうけしか　　同院無文扇
ふ遊びはなしの御子にされて家をおぬすみなみ
そらし絵を〻まゝ野のふりはあまの〻
山まで流れゆくわかれし院の御の扇絵の
の梅とひろきそへらは〻そてへおひしおりたる
おりさきあんなまこゝに色まいつ絵
に御山におはしてあひこれゆく絹志ぞへせば

あかく花さくしけて桂川へ流れゆくらる
かるかはひそかに海ハあり扇しむすびいま
吹きみんしひとしてくせられてゆくに
にかそ吹きて人おりしなり道より大井河
ひろそけは所々みゆるうかりそれに
次なる扇つるかなわたくしに見物きゝら
くそ流にうしかさなる色そその
なる縁因にかゝる水にせきて流しとみ
のひつくらるゝ物とて思ひて扇しくさ
けれハ
おるくなる扇吹上のはまくからかりそまへ
萬代はせきくされ　玉川にむかふ浜の花へし

くるまよりおりれハやかて西の風吹かハりて
むら雨ふりきたりてしハしとゝまり
まれはすゑの代なれとさしいらひかたり
こゝろもなしあはれなる人しかり
さんおもしてはるゝ若浦みなのうらのうた
てらしれなそり待賢門院の女房堀川の
局のうたもあはれにおもひやらるゝこ
の世にてかたらひおかん郭公しての山路のしるへともなれ
ぬし
此ほとりくらしかねてしたしき山路を郭公
天王寺にまうてたりけるに女のもとにかへりて
郭公なきわたりたるにおりから

世中はいつも宿てそれといふめれとやるかたもなき
ぬし
露ならぬ人とおもひけるは此宿にあとをとゝめしその名のみ
かゝる人世のなれて小山寺まてもわたりけるに
聞て郭公のかたらひけるを月あかくてきゝけれは
世はそれとさる所に行人みえし前此ほとりの月影
かゝる空にはつかに鳴郭公の女房世にはうせ
まて聞なれて遠くきこえしとひとこゑて聞
らせたりなれはとて
くやしくもかくれそめにし郭公のなくへき
郭しらす
こゝろよせのこゑをきゝつけたるにはれかのかた

多くの法への心をかりしい御さ此方に御さしむかひ
いかのよしすゝき様に有の花咲そふて有し時あ人きさ通
せめ御咲候と見かへしにすゝくならぬ我こゝろは
うきつく有に御有けに世中に様たり我に我事これ
きゝ候此外よの花よふうれしさすさかへ歌やいますか
ことわく仏に是我わかすきて今かりをいふすたれば
こし心ねしみたちのよは海りこぬこその此にそかりなれ
きかりやおなしに今の事海をの人々御成道とられん
今の世にあれハみさしくの御さのとゆきさい御成とく
あれなきてしよみきれ我か御きハ又ゆかりと今いくつ人の
おさの色ハくれ此事しまあり地獄世のうらみさやおさらに思ふ
今月御いふに御成に道のんゆふのふすそみんとの事

花盛りにたちわかれの心を
とてもやしく今はかたへみちもたえたとりくらふるなり
暁無常を
ねふるもしらぬるの今おひたれ我しも我は暁に思ひてある
わかれよりかくそつれ御もよしし我
まくら八我すあり定よ海すなハ道有てふりそ今まて人し
きのうらみ御になるあしのこ此そしてあくら桜
とみしく
うしとみれ又嘆の色ひに思ひてれは紀に何あし給
月前述懐
月とみしいわの寺此秋まれへくとはし我か袂あかさん
七月十五日月あかく見まし毎夜ごとにあらて

いろて秋つかひの月漸々そ過て出山終に人を誘
物んかいそう哀なる折しも鳥部海てらく
むしの音聞くれ
きのかはのきらうまて花もよくなる出家まかりかれ
鳥邊山そしとくのけしきかりの
うら、かなしく出家月影諸行無常乃
ことはり
く…てかすしるさ念仏すまゝ修まうさん家の家
周行そて修行のこと人倒とすらねしくは事
に修行のこと月のあはくて嵐ふと見えて
かくらきあくて秋の月ひかりさえかしく流れ
待賢門院くれさせおはして御してくらか遠く

人又のこの ほとゝきすさ…くちれけり
に蘭かせてのちかれ待賢門院の局の
かしこへ送りける
事たのまるゝはのちのよもしきてる死出の山路
返し
時鳥のり来てなく物ならしとのまさとくれは修
待賢院の御墓に人まいりて来れける
に思のおしかりけれ
思うれし山の梅枝花みきて野へまかりけれは
一院かくれさせおはして御やうそ御送
まかりけるよそ野にかなしみて来られける
いとかなしくかりけるおりて悲しくそ一れける

しらしめけるこの御ときは右大将
まゐらし大納言とよばれさせ給ふ折に
このくせありしましまして又人を給
はさりける若井の御代をさ給ひける
このこのわれてわしもうりひの[illegible]
よう若い時のこしけりひつけしうてらみ
なく
[illegible]ひしそけりのし[illegible]
れこあまのしせくる天人御しまいせくるは
通ふうみゆき[illegible]
納まうのせて[illegible]人こと
へりうすく[illegible]

[illegible]ありてあり[illegible]
てしきあしひてよめる
[illegible]ひそうそうけ[illegible]若[illegible]
右大将さんより文のあくのうちは毎[illegible]
[illegible]開て[illegible]とうてひかしけ
[illegible]の[illegible]
よし
[illegible]さぬのなかり[illegible]ねりわそ
開[illegible]しゆうそうの人のりく
君のこめあさは世のうきわなれも[illegible]年[illegible]
よし
[illegible]ぬ[illegible]年の[illegible]のくへ又[illegible]

母なくなりて山寺にこもりけるころ人
とふらひおこせて人のとひおこせけれは
くもりて
思ひやる都の人の影なくて心にかかる嶺のしら雲
ゆめかとも人をなかなか見ることの
はてもしられぬ山の中にて侍りし
ききわたるかりかねの山寺にこもりて侍りて
又のとしまかりけるに見て侍りける
人に
あはれなる世をいかにせん人のゆくへしられ
なやとはれのかなしかるらん
返し
露ふかき人の袖をもぬれしとや

いかにして聞てしよりもひかたに
はらひさえてしくみもん露もりさすや袖はかわくらん
又十月の果つるに二條院の御方に御佛
名しける人々まいりて来りけるに月
おもしろくて夜ふけまいりてかへりし
こよひそその山路の月をみてもとやとひけん
御法に三河内侍まいりてひさしくて九月十三夜
人々まかりて
くれはしる影のひかりに月よりも猶さやかなる
返し
内侍
秋の色のくれ行くなかもあはれなる月八十まても
寄紅葉懐旧といふことを法金剛院にて

よみけるに

いまへ須こつきみて此世にて袂よちるはみちしくかり

ありつ述懐とりいふことをしきこしの哥として
こゝろかはよみけるよ侍りけるにて

さりさあれはつくつむしよおもはてさしよ青苔のひさん

十月中の十日比法金剛院の紅葉ごらんするに
上西門院おはしますよし聞て待賢門院の
御ときおもひ出られて兵衛殿の局にさしおかせ
ける

紅葉みて君が袂やしぐるらん昔の秋の色をしたひて

返し

色ふかき梢をみても時雨つゝふりにしことをかけぬ日ぞなき

同院御分稚き人新のもとに古今にて
人をおもひ侍の人々よみけるに

いかにしてきえいぬる常にまち御法にとゝむる人

みちの国にまかりたりけるに野中に常よりも
とおぼしき塚のみえけるを人にとひければ
中将のみはかと申はこれがことなりと申ければ
中将とは誰がことぞと又問ければ実方の
御ことなりと申けるいとかなしかりけるに
さらぬだに物哀におぼえけるに霜がれの薄
ほのぼの見えわたりて後にかたらんも詞なきやうに
おぼえて

朽もせぬ其名ばかりを留置て枯野の薄かたみにぞ見る

けふわかれまりてすみなれたる古への跡の
めでたき人のりく
とみそし甚ふかき御おしとあて昔に帰らむとぞ思ふ
おやにとられてなげきけるが我五十日を
まそしるはさわるれし同じ人の心をもて
てる御おやしみつく人は我おもて閑て
くさひて今すてゝ流りつゝよしやて
つらしるる人はうらみて
そみなきこなるけ御にふかすまじひかされぬものを
ゆかしにつけて物我とひる人のりくに
なきらしいさむひとしかしみなれたりしを
それ也しまま

萩にまんに芋のつゆいとれぬつらひさを世に
ちかくまりてしん人のことと地の時をお
とおそむにあに縁たる人のりく人みせとり
つらうましそ
まいとやさのるん人のよ萩にみ出る水のおもてにあ
同行に縁たる人おもかくとさ深まりと閑
少進たる　寂然
執進すともわ閑きぞ行かれもぞ別かすく高峰に
あし
此世にてあふ高にまさるまじく人そんみをわ
とくの川さ果て弘のしるにひろいさ
高野へ集て贈たるに　寂然

いつとなくひとりすみける山里の[illegible]

返事

いにしへのひかりをそへて[illegible]山の[illegible]

按察大納言入道[illegible]暁に

つねよりも[illegible]日[illegible]

りちん[illegible]の月[illegible]

かへし

外[illegible]のあ[illegible]

はるかなる[illegible]の月[illegible]

[illegible]昔の人[illegible]

返し

いまはたゞ[illegible]

同日のりん[illegible]

[illegible]

返し

[illegible]の月の[illegible]

やそぢの日[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いにしへ[illegible]

返し

[illegible]

院の二位[illegible]

人こゝろみくるし

すれば水をむすぶこともなく袂ぬれて世にすみなし
こえぬめりしの名をも継がせつゝ離れし中の家の名
遠ざかりて浅からぬ中の契り絶ゆるともなほ
船路のすさみ流るゝ年をへて昔の人にあひ見つ
あらぬよの別れはげにそふことも御ちぎりのうへ
ののめの世をへて人を思ひしに風に浮かれて
そられの名をみるもつらき契りの世をもなげきやみ
絶えてし道や君は心にかゝりて
あはぬ人を思ふものすゝめて
絶えぬ人の又別るゝ昔をかけて思ふ
絶のこと果てあはれ

きのふのことも聞かせて侍りしに
くもれる南面の桜を鶯の鳴き侍り
聞てよみける

桜ちりくる木のもとに落ちむ雪の名

少将ゆかりの

春をまつ人こそあはれ別れ路のうきよの
聞くにもあさましき世の中に
菊の花のあはれ見し人の名にかけて
このゆふべ

院少納言

菊のかをりのこるひとの袖をなぐさめ
行きちりて又の名のつらきに
契りはいまもその世の名をみんとて人は又別れて

かへし

少将なりける女

見ましと思ひし別のつらかりけむこはけふあはで[illegible]

のちの入道想見ともかくなりけるにかえしてきにけれ

名残しかひつらしきを　寂然

ともにこの別の袖にあかたけきよりこそはれなれさは

此けるをそれはさきこそ絹からめしてこそ離りけるとなほ

別れしへのつらきひ後とみゆらんやさ南しとへるを絹

いさせむ後の数はしらねども別し人よりあらねは

ゆくへしらねはふつよかりしもあらしも侘くさしみつ

かへし

かはりしよりはさ[illegible]紙にしもともに人紙にして[illegible]

すくさ[illegible]別なれね、離とは躬なれな[illegible]

食らて私には法の綱にさしかえて[illegible]

なさん人紙との上とひの[illegible]

御法とも綱をけれとして聞はかうき数は[illegible]

是はくしてつのくしれ

露かくさの人よりわかうしとひの[illegible]

五常乃うる南無さよみそら中よ

いつすの孫ふうて[illegible]道芝の

[illegible]

沖わうさ機よられわまへ人はつわ舟の[illegible]

[illegible]

かき後紙離とて[illegible]

[illegible]くて人はみな舟罷山紙[illegible]

こゝまでハおさむ苺の莚にすゝむよそほひあらたまる
あら涙ん蓮臺野をこゆれバかへん給ふ事あらん
那智にこもりて瀧にハ堂を給ふめれバ
二の瀧おりし当ハ名へまいらせ給ふも
伝供の御なき人てまいりたり给庭
ぬらんと羽まゐりけれバ申しまゐらせ
しおかんとてならせまいらせん二の瀧の
けふまいりつゝよみ慈輪の瀧なりけん
しく間しきのみそれと申さる
うらうらつさるにまかれくりける
こゝろ給ひてりてを山院の御念も
の給の给ふ前にまいりける也

本の后もの後みく極とけれハとは
給んてこそひかられて
本山の手る行ん後御みる那智の瀧の
同行に給てきん月の比天王寺にまゐり
まかりて聞てひつのとけれ
いかにて西まゐりて月け常にかげに慈ん
瑜河局仁和寺に行御てをにほつゝ人々
しらしわかれも侍りしかあけて
知らへまその月の比まへ侍るとその後
きゝていひをくれたり
曳入けるよみ月ハ光のそれなれ
白し

しいてとゞむる人もなくて月はにしにかたぶきぬ
寂超入道談議すと聞てつかはしける
ひろむらん法にはあはぬ身なりとも名をきく数にいらざらめやは
返し
はるばるとさそふもうれしのりの水くむ人ゆゑにあはれかくらん
きさの入道離亭に堂作りて結縁
すゝめけるよし申つかはすとて
観音寺入道生光
寺つくるこの我里はくもゐにてのちの世にこそ山ふかくなれ
返し
山ふかみそのちぎり結縁さへにものうかりける身を知らるゝ
阿闍梨勝命千人あつめて法花経結
縁せさせけるにまゐりて又乃日つかはし
ける
つらなりし昔に露もかはらじと思ひしられし法の庭かな
人にかはりてこれもつかはしける
いにしへにもれけんことのかなしさはきのふのにはに心ゆきにき
六波羅太政入道持経者千人あつめて
津国わだと申所にて供養侍りける
そのついでに万灯会しけり夜ふくるまゝに
灯の消えけるをおのおのともしつぎけるを
みて
消えぬべき法の光のともし火をかゝぐるわだのとまりなりけり
天王寺へまゐりて亀井の水をみてよめる

流るゝ鮎のかゝるを見れはわか井手の水に影やうつらむ

心さすてらあはれて扇紙備にまいりて也けら

てし新院より頭なる女房兼て詠じ

紙に申付られける

あはれにさきはにあやさきれ風すゝんにおりて紙にかき置

詠じかれしかはりけれ

ちわけりるさぶんなるらん詠紙おなしかれしかすゝん

心性とる手に深き事を題にしてよみ

くるし

懺悔業障といふことを

見る[illegible]あし中にわか詠むきにしみそれ

あり[illegible]えなくもまさしきことにかし

遇慈尊待龍花といふ事を

ぬく日にかはりしやこしれ[illegible]有明の月のあかつき

寄月述懐

西をまつ心によりてかけてるそれ紫の雲に紙をまつ

見月思西といふことを

山のはにかくるゝ月をなかむれはわれもこゝろに西にいるかな

暁念仏といふ事を

かねのおとにおとろかされて十方の紙に念仏つとむ

易往無人乃文を

西へ行月とやうさまかせなんまいりぬ人のなき

人命不停速於山水の文乃心を

山川のみなきは水の[illegible]

菩心論ニ乃至身命而不慳惜文と
あらすぬやそそきしりに御のりいへ乃ちあまねき宗
疏文ニ心自悟心自證心
御のひきそてはちりうへるまわりつらん證らハんとくれり
観心
やみ晴てんの空にすむ月ハすしもしれ山道もひらくらん
序品
菊ちるふもののすりし證さ紀そて光證にし遠きえしらく
ものの香證つる影に吹しめてきされと風のひら絶り
方便品深著於五欲乃文證
これも世すうふ世の闇に御ますの方證之えわらんとそり
譬喩品

後しらぬ人證そけのひとしらみと三は車みん見れて
ころいくまりなる人の跡ニ又十日のうらに
一品經供養しくるに化城喩品
やまもつよ宮の證て世の中宮此ひまいのふかきつて
五百弟子品
とのつきさい紀んにみられてむとききたくは長と家
提婆品
これやさい年つりて御をこそあしはかあそ此きさ木らん
いかりして闇ニをのくやとうんあるニ年あのてよう流らん
いさ紀うこさ玉證にみえこさおそいをけあき御の遠くらん
観持品
ありまこのうろ清け宮此見ひけよりしみすくさしむきも續け

壽量品

りやう山月はいりぬとみな人のなけくはまよひなりけり

きのふうえんの月はあらはれてりやうねはすむさとり

あさき人の説よ一品經法養しつるは壽量

品は人ようつりて

花の道ぬりやうの山の月かけはみてやよるのはるらん

一心欲見佛の文を人ことにみなくさは

りやうの山誰か月はみすらんはまよひしなけれは

神力品於我滅度後の文は

ゆく末のこのよしみなはすくんなまこ我方を老ゆ

普賢品

たゝへしもの白のなかたるを渡るらし

心経

あさしとも聞しよはのかすてつきあり仏をと覚ゆる

無二茶のんはいなく

りやうの山よくつゝぬ戒まはれてあらは佛にふる月

和光同塵は結縁のはしめなりけり

まことなりけり

いまれもなりし常まて寄非よつみなきよ渡るらん

六道のうちよみなりよ地獄

罪人のこゝろあらはくのをうしれとさとるらん

餓鬼

たゝ身のつかやしるひまとときはゐまよくなりける

畜生

うく前よ嵩のとりとふかひさされなう我か乞食くよるくさうとにほく

脩羅

しゐらそあらそふて我もそうていかにも我のうへにしほくく

人

あわれことさ人よまうかうひかりてさうりさもつんあとなん

天

色のこ花のしみそてもひゑかささそてもやそ終思
んのゆりいくるくしも我
あうけちるんの水のすそかさるよかよるに底のかけやくさくまよ
いつそ我きそよくなけぬ身とおそれんの月かけとみさくん
のかれかくつかのよ我つむ道とさいさしていくすくへらう
とくうの我らんもよのかさや南うよんまさことるうことわるるる あか

開きのうくそう出こんてさ我よ本つのもおちよくてり花黒よ人

五首述懐

我身のうき我そうひきてそむ発みる南かもしくる
すくまう我道とくさ海いとよしうこ世よふつさ出すりわける
我身のうき我くれのよせん山さはんわりてそきよ人くわける
歎しあすみさの高そこわれるさの底我しよこのおきらく
うれおふん八我さもさみそねくいさりうそもいさよ点せん
高野よわ京我る人のゆくいひつのさそ
住てしの我うとゆのみくうう所にわれく哀我る人よ
仁和寺の家よてて道人遂年深よえて我
よ隔世絶ええよ
浅くわしん花水やさ婦んさよ我南よふりてさるるる

閑中暁心といふことを　[illegible]周長

嵐のみ時々窓におとづれて明ぬる空の名残をぞ思ふ

事がらまことにあはれ[illegible]比安法師なる歌也

このうた絶てしばしの[illegible]

小袖を色くりかた文乃[illegible]けるに

こよひこそ[illegible]ちりて嵐の[illegible]

見えけりわが[illegible]の岩やにまいわりけり

わがぬ岩やりありけんまりはひむられて

露かゝる岩やも袖は[illegible]

とこのふありとや[illegible]露のこぼれける

られしと

かきりるとゝ比所に[illegible]際乃歌

阿闍梨覚堅に後のわれて[illegible]野々宮もとみ

維のかりかへし[illegible]仁和寺に出て

この無りもまゐりなくてまそ僧綱にあらね

ときゝて いひつかはしける

けさの色やけの世葉に[illegible]苺の彼岸と[illegible]へしそて

わきた比風ひとりひかる人[illegible]後覚りけり　返し

ーー

けぬへよ露の原も[illegible]ふて比[illegible]あきのこぼれける

ーー無し

吹き乱風しやまゝものりき秋[illegible]

院の小侍従例なるとて大事に[illegible]

流としし月毎にそりと閑て[illegible]

ゆふくれのまゝにみえけれはなるへし
よろしからすして人にまさるなる
私云のちの世ひとのうたしく聞て
このうたをみてはくるしからぬ絶たるは哀
なるへし
新古人よしとも云さ作なるものあり武蔵ん
風ひとつの山ふかく入りたまふ人に
縁てよろしからぬをまたへ待けるに
まをみてかくしはむとて
さくめ新風といふおもむきしるさ新古今
わかよ家本葉のうちをみる風をふかき露の底にて
成りて人々いやおもひぬる夜深のうちのけしき

さ会くは長歌の別かんやしなひしてめて
なれも人のうけたるゝものにはあまりてもさすかに
なるへしもわけなきてはよくねたり
新院哥のつゝきせおり御製をきる
心ならぬしなくめ御哥の作者家
たまわつめてまゐらせたるみせよ
つのくにとて　寂超　長門入道
木のまよりもる月やとれるやのうへの秋の夜
この哥し
年ふれは のさやかなる光をそみる
寂超とめくるよのうらさま我
又かゝる此寂超うちとりくへて

新院へまゐらせける歌人々よりつかはし
いとおもしろく聞えて侍りける返し
よみ
家の風つたふばかりはなけれどもなどかちらさぬなげの言の葉
かへし
家の風むねと吹くべきこのもとは今ちりなんとおもふ言の葉
新院百首の歌めしけるにたてまつるとて右
大将きんよしのもとよりみせにつかはし
たりけるかへし申すとて
家の風吹きつたへけるかひありてちることの葉のめづらしきかな
かへし
家の風吹くともみえぬこのもとにかきおくことの葉ちらされん

雑

風よ木の葉ぞちる山に音みさえてきこゆなりけれ
嶺渡るあらしはげしき山ざとにそへてきこゆる谷川の水
よろづをもすてぬるものと思へどもなほ行かるゝ雨
暁のあらしにたぐふ鐘の音を心の底にこたへてぞきく
雨とふる入相の鐘の音すなりあすもやあらばきかむとすらん
松風の音あはれなる山里にさびしさそふるひぐらしの声
音のまゝにひぐらしぞなく秋の夜は
入日さす山のあなたはしらねども心をかねておくりつるかな
何となくすまゝほしくぞおもほゆる山井の水にかけ
水の音はさびしき庵の友なれや嶺の嵐のたえまたえまに
嵐吹く嶺の木の葉にさそはるゝ谷の清水にやどる月かげ

うつりかはる田毎ひつちのおもてかゝみにまさる月の影
まくらへ岩井の水をあかしても重ねや行月の名残
ひかりすむ秋の月のくまもなきは山への夜すから
みえつゝそこにしら人のまゝたかは秋の月影さして
宋の跡ハすまうてさしもあはれとふかき月影かゝるを
新たにそえ山の月はありもうはなの情の空にみえし
としたこゝにひの月影情ふかくもいふそ見ぬ物をも
月とみるかたをさそいそいめてにしきみえてある
眺まれくもこゝそえまみちる月みえてゆくさひしさん
あはれも毎のかはり家のかはいかにつむ月をとやせり
かはりて離れぬ人の身を岩ほに草かけたる山路は
山ふかくは宿の夜ひのましくは水に浮ひ流れ出る心かな

つのゝねとられまけり侍友としる尊とさうちも岩根
行しかゝりて仲を訛てかくしたもとを露も出なるらは
明らさき山路の日をすらうかゝりて苺のさとに霧晴るゝ
行て離れて山ハ下にやすれはしむへいるこゝろかえ
然のすむ苺の岩山かけそけしきむへかりけるへきは守
とくもせて岩まくさりし露そかくよりきけ家の友をかく
わしれそ細かくしくハそこに冬にかけるをれをもきのく
はすふみ庭にうちはへひきてすら縁流もとを絶ゆ
岩間ハ岸を吹めけていう物に紙よれる厳の岩もくくん
音羽にすの鳴をきよ風さして峰に宮流ぬるに鹿
みかよしむあまのはさし波分けて月といみかくさいすの非
光をはくはかぬ月をみつゝきけりいかくまうろかさうさの主

いそのかみ荻の絶まのひまくるこのそうれも咲くらむ
家のまえかりしもの無かれや神からぬ荻か色もかれ
とほかりいも伝わる家のおもふてかしおきさ山路別れちらす
またひさかたのさとみや生めりんむく魚を流きの花
河合や海さ桃そそ山なか松杉人にもすりかん
秘くぞすまくかの秋くの河ちよちつきまろへしきさ深み
雲よくろきこゝは志かしゝ紀の道けまくさあかくれ北山
孫懐しよ志らしの草やそつしこへのまちらる北
こしめやたこさの山路にさそ紀くらか武以る山 中山
よりも日身人わみさむゝしゝ御山ぬ流かつ屋よ
世わくろ峻の小河とみ東つかすききのか誓此村
けつくて月まへもまかりとまりへつてふ寄

かれなくた浮田の花とくそ千すそ秋深く立山ゝ寺
つくひとくけひと絶す山河千すれ山間八水も岩かみゝり
伊まさるし荻の音まいとそれも宋吹風も荻へゝり
小せりつむ浮の氷のひまさて羨めさ神さくゝの風望
なき云八嶺の家路さこそ岩けはつらふこへり
春の都の桜のそこさかりも都くを吉けれもまつすきこと
実晴る面まそうりくりさし都山もひしれ行く浦をみゝ谷
こしも文庫まくて山根の手を紙取ろくへのあけわか
寄まかれ帖ま紙まいみてるむいふれの山もわかさよえて
雲く谷山とくはれもさひ出よもあかれしもつひここす
山ふかき庵二千字ろ此庵まこゝふかのいさよの宮
るそけ根風まうし善のろさひかりる梅の玉夜秘

其夫田舎のことをおもひいでゝみやこにきてハなれぬこゝち
爰のことをおもひてきゝしことをいひきかせけり
山をみる海の面　よするなみの白く波のおもしろきにたとへ
あはれなる八月のころ山桜ちるみちのへにさし波のつゝ
かの細のそこにはすまひなみのおとそふうち見れば
海よりきていかにもすむこと浜ハ遠くかくれぬ浦をさしみ
塩焼きいとなむ浜辺又世ハさもなく波のあまのをとこ
かいそのはなれたるあそび松にあまこのかよりし
こゝろみかれたる松山まつ波のそとも風ハなからん
あはれ鴫とびたつならひくさも此浦ハ見渡る
嵯峨にて見ればあんをいなくさめにせし浦ちる
いそまく浜のほとり月見の中まかり

かきりなきいさめおもひし口はなにとなくあさましく舟よりも
これ舟よりあさまし浦のまに秋のよせてふ我なけれ世に名もなく
近江うらや梅ちるのなひく人いそかれんやまてうつしとれ遠くあるゝ
錦ともいくのへこゆるひとつのあさりとて秋ハ桜よりも有りて
里人の大ぬさ小ぬさそなへてむすびおきのまつのへこゝろに
いさけりあまみなみよりかよりきたる千鳥を妹とあらん
もの浦の松のかけハおもしろけあけぼのくもりくつも今ハ
むけの花ぞくゆくそおもちがたきあはれかなしき浦
あさくろうかねたる此の世にしるべき思ひとこそ志ぐれ
するかなることに下れ此首は綴吹く人を秋乃初風
かりにもなりわかきみや世に思ひつひ見む命をまゝゐかん
まされたるみこそつゝかなくあはれとこそ人はいふなれ

紅のいろなりけりそのかはらぬことへ人めしもしそ為
よりさきふたさらくこそれも花の色よりすさるのまさしけれん
きりあすみ竹のまことにくらめしけりしれきよ鳴蛙を
柳に河風ふきあくはすしくあつくしせしれしもよめし御
ひきさきせそてすおしかれなりけるに[illegible]風にしたがひ
月のさあめこてひと為しと云のこみ[illegible]て此様まで
ちょしもみあれのちめよひてすれ[illegible]すには[illegible]しれも云
みえ色みえし色ゆふせうらきの人[illegible]よ年そへこともあく
いそのかみふるさすみ人かや[illegible]庭花のさきにて家生こう
よ網[illegible]ひさの[illegible]すそよひく[illegible]むへるもんそ[illegible]行
[illegible]ふて哀よむつかそしふて[illegible]しいはさき[illegible]
こうゆへ[illegible]ふくしふまの[illegible]あへおさ[illegible]

[illegible]はよくすよおかかしもはさいしまれ[illegible]
よるのこのりさい宮よおれ八あれ給心度を[illegible]え
山さ八み[illegible]まよれくあれまよりいはいはれよめり[illegible]
[illegible]み八山めてりすう人すよいつすれよおこうらちあれ給
[illegible]くと[illegible]の[illegible]みて[illegible]め[illegible]すよはおりかりよりこ
何しかくせかとさくこそ[illegible]よかれつらえん[illegible]
山人よ吉野山[illegible]よちり人とよ[illegible]すかん又[illegible]りひあり
[illegible]ひ人のいみさは桜作風[illegible]めいちえこりれ[illegible]
よ[illegible]山やそ生しと生よ[illegible]もちわありとんへ[illegible]ん
人もこすんもちてそ山さもいも[illegible]みてりも[illegible]あれ[illegible]わ
風の[illegible]しよ物生よ秋の遊そめも[illegible]のこ[illegible]秋[illegible]
我のかれ[illegible]風[illegible]日つしよ志の行八[illegible]ふし[illegible]人かそて

へむさうもなく月御しみつへくは居續やむ人会のまう
このよるてらすあるれ月を見ますまくしやうさてくさを
八月つきの比より小白川へ通ひわたり
よしあり杭なる家の侍ともよこしのたとしの
もけれとこゝろ通りてさしたりあり給よ
秋風楽とくし給へり庭とこいれ作道
あさらの露よ月のやとれたりしこさ劫く
うきまを見まう荻の風御まもしらんと題
てよへくと御わたり

秋風のこゝよ御まうむこまひくまうすあり霧かけいさき
泉のあめしくれて絵つさへるへのりくよ吹り行
泉よ向てめくりさ絹地まよてらふましみ

ひとくまみなくらう
まむ人の心を通ふてはてさる菅絹とまとひ出らん
夜よかわのてむうし絹こつきりしりてさ給
今よれは菅なるなんせんおやまわうて細長ありり
あさの未よ寒遊る野よまいりてくれの
秋よよせてみりの紙の人くらる
あれさまうし給さくうり果てあれさきらう杖れいうる
あひまうゐうゐたりくへのみちのくるま人通りあり
ワれのうさよりしりて
志いるし月待ててきなめやさんあつき侍の夕霧は京
大家よ良邏りさまを行きまく人を通へりて迷懐
のさよみくつまうすしまうきつけくる

入あひのかねもすみかたまてもきこえけんハ海わたるゝ
大光寺の凱歌の石にも閑院よりうつされて行
わかくまりもりしきこえてみよ海をりうけり
よし赤深らい海をかつしよみやんわけ八
出られて後もかへしれハよみける

人々
またかりもいひし凱けきのおもそい昔なりける

深秋水声といふことを絵さる野にて人々
よみける

海こえつる志の羽のしをしめてみえてつる水や落なる

竹風驚夢

おみくらそ枕に夜かさ深更おとろく竹のあらし

山寺の夕暮といふことを絵人々よみ

嵐おろしに松の羽根おちてまたひゝきおるへあはれ

夕ノ雲山路

夕されやひゝき此嶺を越けしすゑくさゆる山のとまお

海邊重猿宿之夢といふことを

ねふりさいそ此松の枕すてきのさしはひのさく

後鳥天王寺にまうて侍てひゝくしたの
行あるまいりて寄にみえまくして
行もの此松かねあら夜いかた絵指よく家沖津波

寒総之野に詣てさ詠わて立東とか
つゝしくる

屏とそゝ此年月まあつ物絵名残あるおの弐あら暮
しくゝ

ちらされ名残をしきにあつめつれ立帰りけり　秋風楽

常よりも遊さうさうしきに雪ふりけれは

ふる比ある野へまかりてと聞く中宮大夫

のかりこしけはいつの都へいひつへきかゝる雪に

いまはとや山しかれくれし返しはよ

雲ゐてゆきさし山路よりかゝらはしくりてや立まちし

くなし　　　時忠卿

みそれ山路乃雪はふりくともとく立帰れ年まちくへて

山ほのかにて絶々には年絶えあて春よ成ぬ

と聞くかうしよ霞に隔りて山河の音見こ

おほまも紙を聞えぬれく

今年からも年のうらへは日ぬれまよ春続つく杉の山川かぜ

としのうちよ春立つて夜のふりくれく

春しる杉めかれぬんは雨ふりとりぬらのたにて

聖まん人わ霞さ絶々絶ゆるます人をと聞

くれくすつむりのちりとまへくたにとしの

うらは立つらり春のまてしのみちかさきを

かまひて

としのや月ふけて鐘よくなれむへつけともふ此ありよ春

春立日よみる

何しれく春はまりぬとまく日まれんまつる出寺はか山

正月元日雨ふりけるに

いにしへ神春雨そふりまくる聖人の袖ぬれにしやをみさん

山ふかく絶々わくりよまさ春立日と云ことを

山深くて雪の下水とけさらぬ程なれハ春めきぬらむ
深山不知春といふこゝろを
鶯もまてと山谷の鶯ハふる里まてもなくなくらん
さらは侍りけるにてなつかしく雪ふかくとも春を
ら跡まて出しこれにおもへつくらはとて
かつら春の日数のみちまさなる雪ハ消しあぬらむ
ちぎりし
静恵法師
立帰り来やとめへと待わひにほと清やかすの上にハ来て
此わか庵の侍りけるに鶯の侍給へる山里に声のたし
名れく
こひ出くるすまて鶯にいひおきくしや待わたらん
春の月ありさまたるも侍りし さき悩あれ

と風のゆかしけるに読みて
見わたせハゆかる桜花さかりをもとゝめんとなきわれ
國々めくりわたりて春帰りて吉野の山
へ帰りむかしけるに人のこゝろにいひつかは
うつしむかへまとはしたれし
もとみし昔のあとありあそびよみおきしまゝの花を見
みやこそしのはけるしかものしらく
とかりて出家入道してゆかりにつけて
よみおける侍りけるにひさけぬ思ふあれ
とも侍養とのへんまうあらてくさんと
吉野のれ山へつのしたわけらまもと
やくさ物なりけみてよつかしけるに

かりひとよむのくらぬつみてくりよりみく人くはやくさて

かへし　　　　　　　　　　　　　　みやこて

みさしらくこゝへつるみやこ紙さらひくくもまくてへ

桜よりすくひてくりくる柳よもれちた

かりくる紙みて

咲みたる風よすひくらみけれもそしまく人宮まゐ御幸

寝覚　かみたのさりよきる野の絹て出

よろ文のしのものかりよりつのくさ

紀氏みしさる所見みねのむさるさめし人のかするるおそ

かへし　　　　　　　　　　寝覚

ともよみし嶺のかみたれひかれやものかよもさひ出てく

葛飾北斎まゐる　くるくよ岩田とりてゆく

すゝみて下向しけるに人々につけて家人

同しく帰るとて人のもとへつかはしける

故郷の岩田氏さしの文すゝみ君か御殿

うつしき紙数緑よおりまあねさ

ちれりてく紙何とし向られし戸おくし

しられ紙さして

とふや宗氏也八条に似てさき札積みかゝれ

天王寺へまゐりける折よ露れ晨

まりける月のひかりよみて

庭のおもに露落ち枝積みて雪につもる姿の月

宗名歌　おもひ出し　芝蘭所園梨

きみ海すりられくこゝ紙つくさ

として

くみてしる人もありけんと思ひ出るほりえにかゝる下水

の歌也

またもろ人かのてよくあるまゝしき御手か蔓

こひわたるかたきは入末の流聞て

みなもとの高あきら聞しけ風につたへて此所をはなちて

あさ遠く流ありし給ふかれしまはしくなき

しかる後大納言成道のもとへつかはし

ける

風ふく嶺の木の葉にまさりていつしかうらみんとする

の歌し

河にちる木の葉も思ふにはあらし方はしらね

宮人はたえる鰹にこしりをかけて見まかせは

こそ出しとも流れせ浦ゝきこえし

こゝせ給ひり千日果てみなけれは

二世経ていひつらしく

まくれん紙たえ人へて見にまかせそもの

の歌し。

山のはに月もしほりしかまさんの色をみし

しに此所かれらかくへよしかく流れ

かくして秋くれけれ名のありて

たゝに紅葉の散るらん流みせ浦

くそ侍従うの所へいつしや

木のもとにありてよみく

人ともふうさきもみちはをかさそめて都にのほりやちとせふらん
すゝの代国くれく山寺にて見代みそみそ
みさのことくさらさひさ侍やとくまみを乾
歌しけ
御まし見物わけるの紀遊さへ數多らる御供見るよ
いろいろ若まんの大海さん弟の島すひく院参りに
江御ハいつしきさきまて御すしめとおそさひもさ久絵紋ゆき
遠く修行よ出立ゆりたらよ遠行別して
いとしく人くまへてさみ給ひしよ
されと都の詫ひらるもおほつかさいかならむ
年比さへおひとめのくくうたり周りて
離れて遠しへ修行しての御すり心

しかすひたてまつりしく哀れにてありける
さて都いくこの君によれて都の御はせかたしかた
年比さく修行たりし人よ神て對面申しく
御歌よ
わかことまうてしも御さん伊勢へ参りて在るときの
修行して修行に傳へわくくれたるよ月
の比都を出ひ給ひられて見ゆる
都にもかくて月かけ代をそ都をもたとへ見ゆるかな

とりのこゑしきりに鳴つらむさらは
世はのかれそのうらもかりに海のうら
としくれぬ空しき閑の波風
しけきまゝ波のまのゆくしらくもとそ
仁和二年十月十日のよ更けて幣
まいらせられける御へもまのぬさをとられしは
たかいはの社にまかりつきてまゐらせ侍へ
もとめしけるに木間の月かのくま
常しらぬ神さひ給におはしてよみける
しこ海の瀬そふかみかみのつきいつるかけをみんよ
そのむかしゆきてしをと地中の清水と
みるにつけてもしはしはかりけるを年へて身

浪りすてゝ須かゝるまでかすみ浦まで
みちをわけかゝれて
昔みし都の中は清水かゝれし我が住をゆくさへはかなさらん
天王寺へまゐりけるよみし歌まゐる路に
るそこにもかゝれける末の後をわ紙にかきて
西の川よりしぼらされて宿かゝらんたゝらん
かんこしさひ出させくくよみける
まくられしあきのうらしまに昔は渡の袖もらされ
四国のかたへくだりて海のうらうらに同行
の我人海りかゝるよ
こ舟わり人のん紙せ
ひとりみ

いつか我人は舟かくへよするしくれゆく
故郷の方ゑしを我人かくへしと思ひんかゝる落ちに
しひのうらさよふかゝるよ
草枕ひるまの袖はさく露と我のかゝ見よみかへん
ささてしはる我へかゝる山の人よりそて
同じの衆うらみ時紙へうきそて我に都 月とみゆる
つるの衆波にも月はかくれ山歌いとひるん
西の国のかた人隔りし海わ修とて
わすらしすひさす同行の修かゝりあこさき
事の例すぬこし修して人をさわかれて
山さむ風ゝ浪のみくさまつられて夜ゆけよ寄らぬ
大みなのちんとんとほまで月もみえく

よみける
かくさ山にすみける月清みさかせにとはまほしき物を
花のみも出羽月をてしるしめ承り行く哉かな
月をみは哀しそ定ハ忘るゝも女ゝ歳月ゝ人様よ人哉て
とまりその花をもて承のこけされてやすひ
かしまや月しらまみしくれく
とんもそれ玉家のまねといはくまも月をむ花も
こいけらしすくまそ
いかゝして格のひま消りしめえてこいけまする今日の
流乃すくまて
房さけ菊の花よ友なりてさ花霧まもやとる月かな
色ゆらしとすくまて月成みなくよ橋の

露乃さゆれしまゝかゝらくれく
村雨ゝ月よ哀消まし光よくして露花なれ
あつまやしらし雨すれて河面のしら月とみて
非無月河面よられ東や花み捨られ月ハ吾枕花
非無月花まそ定ハ忘るゝめく月をむ花ハ秋よれ
あらやしらしすくまて
非無月河面あやまにすむ月ハ心もぬけまし
行尊僧正
平等院の名られたくしまよ紅葉花茶
かゝくらとみて、もしわかのともありくん
人そしとあくれよ花そしよみける
義もちみし花よ久秋みて紅葉そけ今よ縁
ちくさのさけまて

なそ此色のこすゝ情く人ちくさみけんなさり
あはれとはれり不まて
語によみさけるすぐれさ歌ありてかみの上歌なむ給ひたりける
行基の御うちこのよゝまつこころ
すゝきの山伏ハかのやうに寄せて不審
ひのうへすさんことなくくさの所
もはらこれよりそれも思ひはべしと
厚佛やん歌にて世ひく人は豊後のりもこゝに書あ
三重の瀧おろみやうまことしまたく
ゑそ三葉のつゝもしるくらちし
なれく
身まつりうちまし此罪もあしくれてかくこめのこうけ跡

てんはう輪のよけとすこし不思ゐて釈迦の説
法の庭のいしとりて給おはみく
ことは法とあまりなくさうり御ほえつくをかへ
深行して御く海りゆかゆり人の世まへ
命そてうつやめり事の紛なれし
おしさしり人もまて出さてやすまへまへ入らはん
かのすゝめしと出ひとよしこさくかく
人のりく言る野よりいひつくしれと
思ふこりせそう歌山なくかいむつきとさしお不思やと
歩いへ湯よ海りよりけりよくしうりなる
人九月晦日まさまへのりりかれてつの
そしけつ人よかりて

秋ハ夢花ハ都人かりかん哀るらつましひの又
かなし　　大宮の女房加賀
兼紙とそて立出る空に露けきハ秋ふくる藤袴
はら湯いて京へ帰りまうでこそ古への
色箱なれなるらん哀之なるハいそき帰りし
人のかくしるかわりて
露ハとききし庭の小萩も秋なれはつゆの数そ増るらん
の色し　　打ぬし人
のちの秋ハ露とともぬ都へとちてゆきさき丹波ん
みちのくへ旅行して都りなるに白川
の関にまかりて秋なりしや常よりも
月おもしろく見えて能因が秋風を吹く

あけんわいけるかかんとよりひかられて
名所おほくかかりしかれて関屋のはしらに
書付ける
白川乃関屋を月のもる影ハ人の心をとむるなりけり
さらさまいりて志のふもちぬ済ふあれぬよれ
しよおもして旅え都おもし日数をへつ
けるあれし霞とともにたちしかとのあるさ
とう済そこまんなるへひとらつまをひふら
まそふみたら
能因くわうの後追しおまそハんなすあし白河の関
にけく後の行ハ昔よありしらりられると語
なきまとそみするぬるかそふみたら

これはなから松原に常よりけしく候ハみちのくにてもかゝり
ふりさまりて侍りけるにみちのくにこえて
侍りけるにそやまとしられて人に尋ね
くせきやのりしとやハこれなりけりとて
詠みて
あまりさきにみちのおくに侍りける人のもとへつかはしける
しのふのさとしくれけるに二日くらしけるに

下野国にて柴の煙をみて
都ちかき小野大原を思ひ出る柴の煙のあはれなるかな
名とり河を渡りけるにきしの紅葉の
かけをみて

なとり川きしのもみちのうつるかけはおなし錦を底にさへしく
十月十二日ひらいつみにまかりつきたりけるに
雪ふり嵐はけしく事の外にあれたりけりいつ
しか衣河みまほしくてまかりむかひて
見けり河のきしにつきて衣河の城しま
はしたることからやうかはりてものをみる心地
しけりみきはこほりてとりわけさひしけれは
とりわきて心もしみてさえそわたる衣河みにきたるけふしも
又のとしの三月に出羽国にこえてたきの
山と申す山寺に侍りけるに桜のつねよりも薄紅
の色こき花にてなみたてりけるを寺の
人々もみけうしけれは

きくひとさへひけてこの侍従のこのよしは
おもひしらひまて
侍従あつき此房は常にわれと縁あるをみはなちかたく
おもしろくとおもひて月夜をまちける
聞しれく紅のもみぢきく宮はむかしをしのふかな
新院これをきこしめされて御感ありて給
わけて女房のもとへ
水くきのあとをとめてもかいなきはきえにしをこそ
うらみし
都しるべとゆく人もかなゆく縁あらばみなとも水くきのあと
又女房つかはしける
はかなしやたかきまにゆけそむけ契し須臾の事を

かくばかりみさをまもりし所なれど縁ありてぞ又あはざらむ
うらみし
わかれにしそのいにしへも其別れをもおもひしらぬ人を
遠く御尋ありしをおもひあわすれば新院も
昔よりはかなくものをおもひ人ぞ別のうさ
つらき世をいかにかたらむ
さかひありけるあひしおも縁むすびて此世にもともに
同じつらき人の後の世をねがひけるかな
むかし縁とあるらん
此志に別の世にもこの契は終にひとつとなれ
うらみしかなくてはとけぬ情ありて露まくる
てらしつつゆく
女房六角局

志賀のむかしのみやこへまかりて橋さへ名のみありけるをあはれにおほえて
西国へ下りて侍りける時小野と申
所に八幡のいはれありけるにまうでゝ
まゐりし年つもりて又その社にまうで
侍りしものゝふのかはらぬを見て
青み松は老木になりて月日は我身にてなれ
山ふかくすみ侍りて竹の風の
秋よりはしめて聞なれて
竹のこゑ秋ふく風にさやかにきこえけるに
世のあはれさに侍る人のもとへつかはしける
て世のことゝふ人もなし
こしかたの竹のよしら
よろつの事をみて
うき世にも竹のよるのこゑ
歌しける
秋の草の庵のあはれ風にわかれ
わかれしよりくちきのちの
野にこもり侍る人のもとへ何となく文
いつのまにかはしるらし聞てそれ人に
つかはして
山水のいはにこゝろのすみてしと
雲の絶間のつきの月のかけを
みて侍りて
新年すゝ松のこゑ三日月

松乃木のまわりつゝ月のかけうつりかな
とみしく月はいさゝそて道ゆかれけり
一し状
くみそこそんまもしめ河のあかりさやかにくまもなき月影
丹後の細江といふ所へ人々とまみれなり
けふ又松のかけとゝ御供申すみ月夜あまあるもと
入日影くれ行に西に月の出るまてさしいりぬる
かれし
さしいる窓のいたまのかけはありて光まちける又月の昧
月蝕と題してよみ侍りける
いかなれはひかりの影はあれとも月ふみかね
寂然入道大原にすみ侍りけるにつかはしける

大原ハ比良乃高根の近けれは雪ふるほとを思ひこそやれ
返し
さえてなく袖さえしはのかれてねれは宮のあはれ
高野のおく此院の橋のうへにて月あかゝりしに
もろともになかめあかしてその比
西住上人京へ出まゐるに其よの月忘られ
かたくて又おなし橋の月の比西住上人の
もとへいひつかはしける
ことゝなく君こひわたる橋のうへにあらそふものは月の影のみ
返し
西住上人
おもひやる心はみえて橋のうへにあらそひけるは月の影哉
寂西入道西山乃ふもとにすみ侍りけるにあきの

もいうは世りうらんとゆしうとまつうらし
なう返てしまいろくのも紙ねありあそ
麻のわくへんこうねいとあうかんなさくてらのへとみなこするの
うら色し
志の社之野への錦のきわりし八段あかりんちらし此れ
人おゆさしてひらりまくしてあしぬ
さ海まいひ新しなうしの係なう紙さて
乃あり
一きらくまいそく松本おそうひえんいうてもつて云なく
陰陽師よ係なうりのよあ々雨のくしさぬ
りのなくうりいと云ゆまあうなくれく
六月無くまつりしけりまうらあて

秋さめよつくさんなみなる月にてつくへなるそさく今なくん
ゆらありたる人の新院のくんさう申うなる
とゆらし給へなよし中いれさうなる御返事
なし
りうみ川つるそひくまもいさ舟とそうなりいうけあるさん
御返しとしてまうらくり
はらくひくつるてとみなよかみ川そむなる舟いう絶
くやしらうなれしゆらし給てなり
屏風の絵なる人をよみなうるまの海のさくよお
されよいそしさりのしあな雨紙
いそうつむあまのさ網のんせよ沖ふく風よ波うく船
あれし忠よと海のうらよねかはさるさくる示よ

いふよう歌よんでおかれて孫姫式にも見えたる
庚申のよくしくわりて前よみ合ける
古今 後撰 拾遺 是ぞ香梅さく山吹に
まじる影としりてよみける
古今 香梅まよ次
紅乃色こそ梅花かん袖よりふりよ香やとめなん
後撰 さくしまよ次
春風のふきとこそんよ梅が花とをかくしくゐて紀
拾遺 山吹よよす
山吹の花咲井よ我さとこそはやしう升そりしとかさそうん
祝
菊の花しふりくる歳のあけりかよ数くさわかさえか近代に

ひよふへよとの代さおしあつむしと玉かよらひのさこへ絲
菊うらむゆりぬ曇花ふりまねは玉かりとせとくあまらむ
むれえてぞ井よう花し恋を之窓かりとせつへえよみたえ
治へらりさぞうしむき霧のこはないえさまへつりそしん
大海の玄ひて山よちうゆそよよ玄かくらぬ玄よ雨し夷
君か代のさなよまうて代恋はまし人ぬ松花色おりま
君か代は天津宮かの宇宙花や松まられぬ人はれとして
ひらさすみうきの山花野日こそけよ萬代花をめしこ今
君代花さめしよひんかあ山花をそれて宋よ恋けら小松代
みすくる 波のよ之徳への色そぬて孫さひ雨さら行の松
あくさすひらむ仰ちうしよ雨さえてよまうらよ花数をそ定
作の世と玄うみうしよそめられていく世まちかく久く遠

むまこまうけて悦ける人のもとへいひつかはしける

ちよふへき二葉の松の生さきはみる人のみそうれしかりける

又葉乃下にふさくるる小松とものなれは

子日にあされたる日やりの河にひさしくへて

つかうまつりて

春のくるこゑにし此子日まつりはひくちよを経なら

その松はさそへてこれ松の名こそしもあらん

して

子日すらの人此秋もそのめしうた読ことしけれひく人のきさ

世よつくへぬへこころゆかれるあはれなる人

のさかりなりしは流るひて清水よいへり

越りしこかはりかなはいくしくなり

乃ちはゐさしくまていはきつるへしかれしことはの歌

是よくして

あらはひのあきひは秋りき滝こゑれ松笹の

八条院の家にありしか白河殿にもあり

わくせられたるにわかれて出入てしり

出しなからみ水よ月のうつりけるし紙

ありけてこそんとはみゆる

けにまさの名よゐかれ人常にわかれ月をこころよの水

二条院

御よ貝わくさもとせき勢なるよ人よ

きそんして

此よして波とあさしろうらしくは小貝紙ともおもてひろふへし

かすみしくおりのまきれて出るしほにのれる貝ひろ
風吹ば花咲波のをるたびに桜貝よるみしま江のうら
波あらふ衣のうらの袖貝をみきはに風のたゝみおくかな
なみかくる吹上の浜の簾貝風もそおろすいそにひろはん
しほそむるますほの小貝ひろふとて色の浜とはいふにやあるらん
波よするたけのとまりのすゝめ貝うれしきよにもあひにける哉
波よするしらゝの浜のからす貝ひろひやすくもおもほゆるかな
かひありな君かみ袖におほはれて心にあはぬ事もなき世は

入道寂然大原に住侍りけるに高野より
つかはしける

山ふかみさこそあらめと聞えつゝ音哀なる谷川の水
山ふかみまきのはわくる月影ははけしきものゝすごきなりけり
山ふかみ窓のつれ〳〵とふものは色つきそむるはしのたちえた
山ふかみ苔の筵のうへにゐてなに心なくなくましらかな
山ふかみ岩にしたゝる水とめんかつ〳〵おつる橡ひろふほと
山ふかみけちかき鳥のおとはせて物おそろしきふくろふの声
山ふかみこくらき嶺の梢よりもの〳〵しくもわたるあらしか
山ふかみほたきるなりと聞えつゝところにきはふをのゝおとかな
山ふかみいりてみとみるものはみなあはれもよほすけしきなるかな
山ふかみなるゝかせきのけちかさに世にとほさかるほとそしらるゝ

返し　寂然

哀さはかうやと君も思ひやれ秋くれかたの大原の里
ひとりすむおほろの清水友とては月をそすます大原の里
すみ竈のたなひくけふりひとすちに心ほそきは大原の里

あまの川霧そこひなく秋の風のひとひとさすのしす大宮の里
水の音は枕に近くきこえて猿の声のみ太山の里
おもふにも草の名の花も神に手向て太山の里
山ふかみ峰のさくらもしくしく庭に散しく大宮の里
まへすゝかたまた本にあけはなちて心ある御前の里
浦ちかみ門は本にかくれてひさしくこぬ太山の里
かくれなきあまの山路にかくれてちからなき大宮の里

神楽に星を

ふけて出る山のかねの星八月猶之をたつぬれ
兼和元年六月一日院熊野へまいりし給ふ
はゝそてに行幸に御弁あるかな時もし
めくりて二日の秋に帰りけるけるまての

おもひいつれはいつも紙みしは婦二
条院の御幸神とも坐らんと見えぬ
絶こり若き御幸紙たりつけて歌よまれけるらん
代のしけえ紙あかひらん浪いよいよ人よしけり
もやとみえて
いにしへの玉のいけえ紙のひかん時さるに見えぬみえ
新院おりしまさぬこゝろそてまつりのくさと
かうたれしもこゝろさ御紙とそうして
兼氏無如きにの御へうむめきまかれそ付ぬおかみへ
ぬかりつらの此か笑蔵に面つりるりたるに折
うれしくて御かされきまつるひまいりまきらし
数よつきて但しかしおもきてあはてハさらし

そて躰人のくしきふかくすまひみしよ此す
ときおりしすあつまあそひのさしとしつゝいい
しつとうりくりさゝそて忍のよすゝぬめ
神いるよみ頌しけとそくしきんへいして
よみ侍りき

神の代よりかくとみちかれ昔よりつき流布すせよ
深抄まふよみさしのをし神さひてさこ
うれく

みさしのあれハ也さうめ御末よあれ殺わさまのち
伊勢よ御かくらりかく太神宮よゐいつて
よみ侍り

桃くよん紙けんゆふしてまつ人ハ神よ佛かわかくり

新院世をさきて女院のまへ参りたまひ
人のうらへいりかくれしゆうしおほして
くしてみまいらかくよくやありかんと
おもわれよ光そて御かへりおりし給ひすさつへく
さんしの扇のかりくへやつくらしたり
君ほと海ぬ御うらいあれまてあかす川いお姿もちさう時
きゑし

世のさゆいかうし人の作そまいて歌のはうらとさらん初とも
伊勢よ新院よ歌御前そとし御まへくり
新宮こらうかさらしみてついらとさ
紙ふやうまおかくらかくろ紙みく

いけく文いうさ此のあうわれて志女紙こらよれい紙給へん

世中に大事いてきて新院あらぬさまに御
なりて御くしおろして
仁和寺の北院におはしましけるに
まいりてけんけんあさり出あひたり
月あかくてよみける
かゝる世にかけもかはらすすむ月をみる我身さへうらめしき哉
さぬきにおはしまして後哥といふ事の
よにいときこえさりけれは寂然かもとへ
いひつかはしける
ことのはのなさけたえにしおりふしにありあふ身こそかなしかりけれ
返し　寂然
しきしまやたえぬる道になくなくも君とのみこそあとをしのはめ

さぬきにて御心ひきかへて後の世の事
御つとめひまなくせさせおはしますと聞て
女房のもとへ申つかはしける此文をかきくして
若人不嗔打　以何修忍辱
世中をそむくたよりやなからましうき折ふしに君あはすして
是もついてに具してまいらせける
あさましやいかなるゆへのむくひにてかゝる事しもあるよなるらん
なからへてつひにすむへき都かはこの世はよしやとてもかくても
まほろしの夢をうつゝにみる人はめもあはせてや夜をあかすらん
かくて後人のまいりけるに
その日よりおつる涙をかたみにておもひわするゝ時のまもなし
返し　女房

わかまへよりくわられまし世をわたりまた賤と云はおほけなし
松山乃おみさハ海よふくおりてさらぬ世をいとふ身はたゞ
波のたえんの水絹ころもかりさんらす絹とハまんろ
老人述懐とりふし絹人ハよみかへり
山ふところつえをすかりていろ／＼の人の庭のあそびしさ
れ京大夫後成うきあけめかりし闘てうさ
ほりしすしとて
もろもぬるしのくおれとあつゝ冬よりあつ老ひらハらん
う金し　後成
世紙にてゆわすし道のさいとそ詠さあつる世ハみゆ
戀百十首
ちひ雨またいのおそて池水れあつさん秋の文にしれぬ

おもき名にてこゝろの中のいはるよ風まさおハ秋の露
つめしきのみさの世よおもくれてこわ世の八袖しかれちら
いわれや秋よ人め絹つゝむまよこおそいとねんへハ
かくよこのふゝきやこゝろんかくさ世のよろし人おさ
気色とふおやめてひよれしよ打雨はそてしかし
ハよいこのふゝゑふゝゑよわくこゝろきハ恋れのみゆすかり
色よ出ていつしる物ハ世はふかく同人おもしいろうへん
おゝしれわくてやとめりぬるしとみよ世まもありくるに
うき絹とてこれし恋れこのこの人の名よれて晩き恋れ
みさらわかみさらり世へし秋りけ人よこゝろ秋すゝハ
なけき雨まわ葉のもさひよつて世よこゝろわハら秋わり
秋ちなけんかのうられこゝろしき絹何にしくて恋よこゝろれ

今ハ人めものふにそ忘られぬなりけりハ人を思ひしに
人のとハぬあらしにて梅のちりし々ぬ白ひかひけりゝ
なりしを中むかしの世に人とみえれしも見ぬハ花見人にきたれ
消えて行夢幻袖そしられぬかおきたる人ハ一分すりなれ
いつまさんそ此夕月毎のかはらかやとよもすぬ独覧と
さりけるをわれハ今よにありかりゆかぬん此ちりさ
今ハさん見と我と見よなり景て人よりまてやとぬるそと
わか人のよまいに浦して梅の色離ねわくまず此ん
うくしぬの花も絶いとり床の花と毎ひとり延ぅ给ん
ひさかへてこれかりん人ハさくらりし絶えれさくらん
七夕ハあふ絲わりけりとまりん秋ハ別のつゝまこかりひろき
紛しく八笑袖しわ志分球さて人よせれ分むをせん

紛房よめかりし排徊おもかしとまやりそ夕に我かみをも
侍りしそ花よみもやと俤しくめハね見えすし荻風に
けめとよ人志りこのや大井川いせさ此ひむ絃へらの
あふまそ此際りうまを出すのハくもりけりく秋人にふ
今よりハあらそ地と出まふよ後うるん人よ弟とすれば色と
いとろしうらんむすと此ねさきは出ひなとをすすらうここさり さそよ
袖のしれ人めともわりし拊まそにみるなとくろか我かみさは
おもまうよ人のめゝ恋しめなるみさか絶ぬんてよ秋ふかく涙
荻乃もゝハ秋地わりし秋よまかすれハこれりて扇よ神代見えて
花まえ見けむ汲まぬらにれてあすゞ昭此ゆうまれさ川人の然を
気はしそ人の人ハ此かさけあれなぬかすしぬるかよかふぬすさ逆
いつよせん今つさ名作緒よまとして景てものかりしぬ人の恋

忘しれんことに縁をもとめて世のはかなさを[illegible]
とくれのなきことをしるべし[illegible]
つらむ人の[illegible]といふ[illegible]
今さらに何ぞ人にとらるへき[illegible]
わすれしも神にあらず[illegible]
色みなさ流の河の水こゝには人[illegible]
諸人のそひより[illegible]
よくしるべき[illegible]人の[illegible]
このくれ[illegible]
更にすゝしみ[illegible]
かくして人の[illegible]
身のあやうき[illegible]

河のせまよく流れぬへ[illegible]
かり神まもく[illegible]
とあつりあり人[illegible]
身をいとい人のつゝ[illegible]
すゝ我[illegible]
うらしけて[illegible]
我つくさしし[illegible]
こしく入りて[illegible]
物やりは神の[illegible]
其のんまあ[illegible]
あふし我[illegible]
いらぬそやひつ[illegible]

我こゝろ地獄よ人やみにおもひわつらひてこそ我もしらす
たゝに我いろいろ我ら疑ありて仏我くし地を地獄へそのまゝ
さしぬるまゝにむなしひのさしぬまゝに疑と人の心やうこゝろ
我のこそ我心とはいとゆかしむ人のおさまりけれ
こみし地中に我さへつしさかとしてこゝろんへつまさに浄
いつれもむなしひいふに此煩悩をそこなふも床やうきこゝろ
これをみるに昔のことしもおもひなきもあかりにしかりもなく
さるに我つゝきん心より地と地獄へ疑としもいむすひとなく
なまあぬるとのこゝろ色ハこれて地と地獄を身にも
ときこそいそさはしてたすくうにいすさりはく白は浄きを
みけしとつかし仏なみさとよりなくさこゝろん心にて浄世
みゆるしこしさ御仏ともかゝり果てしてたのむ方にこそ

ところ我ひとん人にはよりにんようつことしも地中に金を玉もあり
おいきよ地中にひとそまるもれ地中にひとつにぬひとなしまゝ八
めでひのうらさらぬ是ハ善をぬまさん事みを成仏とこのみぞ
かそれなくことわることくへのとふハ我地獄ひいふりかしめと
とふるや何事をつさんなの世にひハすにつさこしこれにけ
けりかしやいふ我地中ひのそのよりて月日を送るハ我らるらん
いさ我心さしん心のとまるのて浄きなりてこひにまかす時
君をまてふ心のうちハちこめさせてみさりとてまゝら我身の時
ありしさ君この心の色といふて念ひちつこそ袖のつゆん
いくりよもなう夢のしさ世中にまぬと云てそよろとしれぬか
流る我ちからむなしき我ふしひあけてこしと我んへと浄
またけた川袖よりしも人て志のよる多く我此比ハ春のあさきとへふ

うさまよりはにいよ時めく秋神無月にはくはかなきの気色
んぐらんがよあめは紙せきくせて侍はぬらしらぬ秋絵こくり
ひとりきそて秋絵は海とふか衣たかくとこるとさぬらし
いひそてうみはいりよつりんとはうして人の心て
すけりしんのうられたらし紙人のたつけ忘らん
人丸れなかみさよむをふ日会ハひさろきてれおもうれ給
こひさやかろふこひもち入神とよく方も秋さかけきこえ
あくらさま人めそつまよりれたら大殿のふひ知なき候けん
忘てくきしうさ絵は於雨むくさう歎してひま絵く神とさ思へ
歌此よ存さよ雨に及く寺のん此らくれ見忘とそ之
秋ここりよしむ其のなす見ハ人とこに恨そ
さすれあらくてやこめへお花嫁此けれ給えすハ被

侍めよよ雅もハおはらおれ出そうしなめくきハ波そね
秋をみゆきくれめつ分をせへ彩く神此なりくれらへ
またこと此あるへ事からしと出のとらおてへいへまてこらもらん
しらめくし出ひけなけめ存くしひめるくしこれ秋人心を
忘てよらむんの色此つきまた白ひすさしよみぬへくり
またとそい人めさへくすなりくそあめるき海す此神尤也
分けそく海乃こそわれねと白く清けよあとならすなくハ
からき嫁よそひつけそうしみ海しひとくはつきさ思ふのくふ
しみたさなくさめて海中しく清くくそて人のおくめ然
おもえて見くよあへ人いかなるや秋成よ歎し世すしそかれ
とうまくるいひとく海おりこき世よおか見へすむまひれあるは
おもてしよおけそく世といひとく海しよう也人をとこれさ

かのみそのよれ為のさめくおれ字奴きねかりけるに　なし
此哥頭に人のよりかゝりてしかありける
かくすけるとも思はさる人のこゝろ
をくりてそのさまかはされはひとへにさ
やむかしいまのことよりあつめられて
ところわかれしものゝひとつとそなり
此集をみて返しけるよし　院少納言の局
うかるへし
ゆくへしらぬ玉章をもしはしひとみよあり乞絶え
まことにわれもまさしくわれはみえけり
さめきにまかりて松山と申す院おはしまし
申けむ御跡尋ねけれとかたもなかりけり

松山の波にながれてこし舟のやがてむなしく成にけるかな
松山の波のけしきはかはらじをかたなく君はなりましにけり
しろみねと申ける所に御墓の侍けるにまいりて
よしや君昔の玉の床とてもかゝらん後は何にかはせん
同じ国に大師のおはしける御あたりの山に庵結びて
山に庵むすひて住けるに月いとあかくて
海のかたくもりなく見えけれは
くもりなき山にて海の月みれは嶋そ氷の絶間なりける
住けるまゝに庵いとあはれにおほえて
今よりはいとはし命あれはこそかゝるすまゐのあはれをもしれ
庵のまへに松のたてりけるをみて
ひさにへて我のちの世をとへよ松跡しのふへき人もなき身そ

さて紙又紙をみつてもうれしさ松かゝりゝまゆんとうらん
宮人のよりくるま
松の下ハ宮ふかれ此色うれしみる白妙にみなつ山路
宮つみて雨もなす候へ花もおれんとさき此松さしなき
堂とみけ情の宮は月さして毎に人宮もあるらんかゝき
峰ふ色ハ毒世々見てきりよ宮もまた香をすり
われしまあれあれく宮此くむかきこうりうらんと云山路
神くの谷の細石うめ宮ありとて人此よへさらは
よにに此宮まもの箱紙けり～てまろうちひ此都とも
とふまりをけり地らしと如しこまあくれ
よりくわゝれく
むかしきゆく海くあの此地しきまふらなく八何まで霞も世に海く

大姉のひまれさ世路ひとり来よりてぬく
しめりてためらしの松のくもり
ゆら紙みて
景色あれし野山ハよそる未此かへもえて此葉をかく
当まセく木々井の水此けれ我さハんとありくとるに尾

又あるナリ
海んさもしの行道とこそろの行くハよ此丈
ままもて身紙さてもらくすゝり大姉の
流能しさてうつませかりしまたしく山此
嶺ぢらとうのさと八一丈くらゐならん

つきてそれからされハ日こしまて此
わらせおりし御申して行道し おり御申
くろしとや佛ともめぐり行道とへて
やうまんて二重まつきますともされ候ら
のおりかと此おやうきこしま大事とある
く御へてと ひ(まん)くわけりますて
めぐりあらんて此勢をしおりしさこらひさ山此(みゑ)
やうそそれからハ大師の御師よあひまいの世
をもおりし御申しる嚴すわけのえいしまと
うの山紙ハやしその邊の人ハけのいしまえ
まくすひのろ山わりしとハすてやしさすみふ
ての山ともすつけるわらし縁してみれハあそ

りし紗てまろくと山の嚴のさきまで
うらうやう彩とこまのくし ともめり行
道示まわる御へてうきうふのおりわて嚴さ
御わりされて師まあくをおくて御しらる
まろしまとう紙まてておりし御しらくり
さう此ゑを忿とらわ彩くおあきさ彩りる
肋乃大くろしつわ彩りくさうしのあくみ
苺ふくうつきれまま石おりさまのしる御
おくまみもふその山とやく石をつきて
まそ此山まくさのかりてさみつるの苺風も彩生風迦
善通寺の大師の御親まハとしくまさし
あけて大師の御師くさんをされさわさ

大師のみあとをおもひ海きし四の門乃うく
りくはれてあまさハしらく海し一あ
御さきたまいそいらなりけんとしと
おもひつゝゆく御跡し給しの
倫前國しゝ小豆島よりきたる
ゆゑにめくりし人あとしらぬしとおく
われくとあそすうさとさいよふらぬつけ
てらそはまかりそのさいのしそらめ
と八十一のさかしらふたうかりまきこさ
うきあま人のしそ神かわとらんとよき
しらくさ給しこそかみさこそはくしし
くられくさそてよをこけるか

大師のおみかけし札納ふ八つころ中よりすくれたるなる
なくしかハとたり方人海わて四国のうち遊
らんとしけるよ風ありくてうゆくへゆりたい
そのうらさとりおほよおもきりのとよの
おほき物納ひろいふとひろれくけと
よりのひろふまりとりけり納開て
ひくらそてうらよひろふあまのこハつもりつゝ名残
まなべしとし給よ京よりあまさくしよのく
よりそやうくのつこの神しよあさらひそ
又しらくのたまよりつてあさなん
すりよしアくさ納開て
まなべしとあふれよふあさ人ハつ納ひて游ひなる

くしはさしくら地とおさてひだり紙へくばく
よひだりへ文をくり紙折して結ぶ事
アリ々ノ伝聞て
一 ぬしくはさみ紙をさして折かけ文さきを結びわけへ結び入てたまいあり
うし常よのせとよお文はいそいわそしきるに
とりりの紙とりそ身よいれてしくら
紙みて
きさ文すむせと紙書つかりしめおていそきらしおき紙まき也の時
中るやいそよつきておさとよ紙あくひとにんり
くくりとくしつりそて
一 此ねはよくさ母りむきよ浪うさそおらひさとうくおまき浪紙
郎しくす

うきひのくおみ紙わけすへまいめくたかくさきあつ志ぬくらのく
文しく此紙へくふとりひてさくり網つ中紙おまよ五
ひもよ人のいろしくひのさ紙小ましく文をり折しきり
いうおつまんと公へしむ紙つのふのわみへめさへ公まさこれ
結を紙くうしよし紙りまんこのしのさくのく
つま結浪まそくへるひとい中たし海しすむ
くひそもうし海とりしくらうきわ結ひこ
一 すらし海やさうし紙のしりけへそくうさんまやよう紙はさ
さうし海紙いの白紙さまみれきうし紙濱よ折すと紙
しくすらの紙文海紙いのいしせつか白木海しぬさへさ文人のみ
わく紙さくさを紙うすきう紙へさ八そうしすさ海まを紙
結を乃みてうのさくまさらくへ折つめ紙りくく

ともにあつまりてけしき入こしおかし
も海くりあつめくろ紙にすゝみ
きおまへてそおもふそさしこころ
こゝしくれくらひおもせよ京よりひとの
たきや給ひれしえりくしらかりけ
くるま

かそえかふら紙そ海くり給ひおもせてそ行末
けしきへけふらかくらよ井のひとかく海
くりなおもふゝのむねとかくこそれとかり
こらうかしくはことさらりくら給
みて

りうちとも井のひ紙そ給つゝ給さん人あゐすれ路とおもすゝへく

沖のしらなみ風のあしきとてくろ給よ
り給つりくら船よせのくわくろ給みて
けこさもよら給つり身をひとつのそれ給よら給
みなとあるりくらしるれけしこけらわすれ
くるひとつのしらなみよ海わりて来のさと
しいかりそろしかし給ひなくら給関て
すゝゆらゆることさら給うさら給さらよくら山海
もしら紙すらさてそのひとつすゝく紙おもひこの
うらら給くらりくら身のからつきとかし
りの給りてふいのくらら給つきくら給
みそ

宮路川のくろせうち小屋へ身給つもろもふいそけ

いつ色にも匂ふ今のかめいさかへつけとぬれにまた侍る
ようつきかの井の水のひくまへもあつまる夜舟のいさ
ころのよこあるひめてくらせまいらまいらせ候
みつからさへきのにくらいさ程とのいさへさひ申
秋風よすさ涙の色しるかうの袖に心なくさみて
新宮より侍をかりとく侍りわかうるよみをし
ますかれのさうしかうし人のたうるにと
ハひとすらすわかゝ紙にいよいそ
よくらうし給ます今ところ浪をつきそいくよすまさ
たうこへこそうをみかし白妙紙かつきそうる紙あい思ひあま
こゝりとまりのうさよみくらり申し
思ひそとをへもうと参らい侍り御ゆかしきいへとも

わかれたる色よ御入ろてわするれ共わすれかたはりかりハ露人ちす
なかひのそらかれ給すぬるこうぬれはくつよわれもとおもひ侍る
月のゆふかけはまいりてよみ給ふ
月のすむみやこのたよりきえてちかりし御行にこゝろ
なまめくまいりなかめこしのみ有明
とみくよみかへ
思ひかけ月のあかりよ色はえて光ささめかこそ名残
さめさきの国へ渡りてみのかうし津よ
つきそ月のあかくてひくのくもりよぬ
かりよし袖くみしけわらうるまにいまた
しらのはくのくよつきそとひつらめ
了紙

あさけ行すゑ月は氷をふみこえてひえわたるまでありし村雨
いとゞ秋の夜のくまなきにすゞしきみえてひかりそへ月とうめん
おもひやりて月の影すてゝ秋といふにすみすまする人もなくなりゆ
立ちかへりて休まらぬ今宵さへ月の影をさそふにまづ月の影はみがくべき
まのあたりは猶よ影とやすらふよりはまづ月かげのめで
月をおもひすさまじからぬ人は年のしも神さびし影のやどりし
ん世のみなくしまくもしめてよすがら月のひかりところえぬ
夜ふけゆくまゝに袖の袂にやどる秋の月みるにもうき世の
おもひそへて月にゆくへも見えまし分けぬかたに歌よむ
いつの秋この世の空をへだてし我身も萩の上の月とひて
浮世にありつゝ花をもよそにいでゝひとりてみつゝあさぢかの露
今ぞしれる我を捨て出ぬ袖にやどりてむなしき影

すそにさそひておのづから人はなく我が身のほかに誰かは
世中をいとひて捨しぬれて後の世を遁れぬはつゆの夜ふかき
捨ゝ我は我がいのちをしらめてみるよの中にかかれ果す
世の人々のあふくやまのはとなりにくらくなりていふむけそ
くまなきのうちもさけざらぬこゝろもせんこの世かへりてからのあるし
おもふ我が身ひとつにくらべてあらぬ影のあるかな人のかへり
めぐりいのる月ゆふべしてさかのぼりもとめのみなもとの山
さらにみゆる空ゆかりてあくがれやまのは
でしいるんとしてからくも我身かく
これを見やすゝきみちの我をかへり雲とかへりてはやかゝる
大峯寺の金堂にて詠みて
庭の花さかりのころ下の句をかへりて有海まへゝとゞ

湖のほとりにてしあゆみくるまりて松
らんかすみこゝろくら絃みて
まれみえしかつらきあせる松のこえ昔のゆめ
のこりかんとまいりとて
せ絃をきゝみやうらき河とほとりかんの庭のすむ人ちかう
みかひ出て雛かとめてかきこえいつ山道の宮のみこえ鏑
られ行のほまいくよ久かきふて庭の志をあけおもきへさ
そのすらよりかへんおすゝ人をかりてよそつらむ
みより宮松まきめく白鬚ハやまきのことぬと山まで家蔭
さらぬるゝぬあをるくむの宮よくりとへ八宮とあら山みち
旅ともみゆか宮ともありてそうきほとりこそおけらし唐すみ社
みなつく八幡の氷のとみそれちせのをりてやまきき

清かりしはま清めかゝみまよし雨にそめぬれと袖のあらくく
宗かすむしきの岩より出る水の絶ぬまとそへくらうさ
くらし後みるの池乃流ゝ水のきこえへてしぬる水の流の雲
庭はまつ寺の水のいとなみとせきとめて門田やすの上のなか
みつこるとあととかやまの雨にし日和まそめて雨んみへ
あきの色ハ池そ聖りせよふきかへて寺河西の錦の袖
河西神の社をかの山よおきさ宮てよしこの庭をわきこしれば
いせのいその浪へちれのしこきの流よりそふれ
みられらかくる絃
瀬すくわ葉の色とあら西の鄉の郷と云へきそん
みちのくよひいつとまむらひそこまれ
絲より山のなまよしきさハすくなきやま

さくらかりみてゝかへるに頼
てよめる
きのふまでさくらね山の桜花かはらぬ色をみてしとも
せくまさ人みぬむかしのなかれても残紙いかん山部ん
はなふみくさきのちくらあさりハんてみるはそよかな
まひるのぬ人の大かすりかりゆ月よなしの
むの咲きかゝ絵みて我しのかしきよ
し紙ねかひかくまりしやと人は残気
かれさかしくゝ後ミしる紙をひと
什一のくしてこれをられもつゝるまに
むかねかしくまつむさかれ我ハひとへ我れをあけみよ
さぬきさの後にかりて淵しかり出れみ申され

よしのたうと聞てよみける
みよしの花のみなもとをしらはしやれかたは亭
日のいつくのゝし
後花はるかに紙川みよう中ぶ花入見山のさかてゆるあ
影しけす
山さとの今はさこ花の後なる花はなさきのたかとおぼしける
すゝ人たえんハ見のかしこはの家後えさうすはひの花枕よ
流くしよかしいとかしいの紙の流かりと六十月廿日
おちつきもてすゝはひさあけて京之人ハの約や
後と花つりの縄くふりよし縄くひのさけき
しては網の船の内のすゝくはあさらぬ
としうちもかりてかうけ御しくまで

むつましく侍りしにもれん紙にかき
くらゐありまさらさきおはしけるほとにも
いそしますやうなつけてまうかまえけこ御ゆかりとの
いそきうみて彼らかれてさまけれは此御ゆかりの
おもと
御名

百首

花十首

すか山も花さかりにはあしたのなんには紙にのこる
すそ山にもみちは桜咲そめてはなくらん猶うらうすく
人はみなうちて山へいりぬめり花をもまたれたと思はん
ありし人おもひやみもし山桜はれと紙にみえむとまちて
山桜咲めりと聞てもみえゆかん人とあらそふへくもなき

山桜かけろふみえてはなのひかりのかれくるよ流れ行く
花の色も花をまつりしくらかりしかさくらいひなからちる
すかのかわしのはなの盛の雪を花さかりくまのかけ
よし野山ふかくりかりあまり手をもぬくちまつりて春の下水
猶まちえて花そ散をまちかてに吉野山桜の花さかりのよへてみや

郭公十首

あはれなく花のかをかへてきなく郭公こゑをまちて郭公は
くもるをまつにも咲郭公の声なしとまつひくらしくるかね
きくそかん人をおもひしれ花のこゑをまちて人に行を待めり
なかくこきくらして郭公をまつ人をまちさらんとこゑまち
神なき紙の聞えしものはしるくそれとも郭公ふたかたのうのはなの
又月をのそれまちて郭公はゆふつけるのはなさきし

都なりて関まて似さわくらふくさ山への暁のも立
明るあくさ山へまたもむつひは枝まつくし空ときさし
よりのとうふ紙かきうりあん明る袖と関まちく
明る月のさふく山のまま出つつ立の海りけり

月十首

谷川の月風のさゆうはあしまに似ぬけそすらけ
池水に夜さまくすむ月けは風のに氷とさき浮まれ
月紙みてあける紙の奥は浦紙すうとやさへてきさん
窓あるちさる紙の海の中のえとくさそあしふ月紙浦
妙りひけくちさる紙けに数すいく夜海に月はあとし
大空の秋と月まつてますてふきちら寸風の名所
あまさしのけいまへうさ君とよくうし人に月紙とし

妙のあら紙まなは海都さけすせりのあまくりて月紙まへ
うれ世まほひく紙さし出入し月のすまたのくさ紙え
月のよやもりく紙すりていつくすも人恋さくさん梅とは

雪十首

恋うさる紙仙のあちらとあそまし袖雪ふりぬむき紙山人
いそかすん雪まつの松へとさめられて山へ風さとくまさ紙すわすし
表さりてられあわうん山さとれ雪ふわうち花夜の文字
さえてうえと海の雪ふくとの船もこいつくこそかけ紙あれ紙
いうさ恋紙浦紙恋うせとみしつくは雪をつくいくかさすき行り
きよりとそ枝紙雪紙まるすく山さといつよりてあさ紙ま
あやうくはきれいくとあ紙乃にありてよめまの人もりいかさ行
暁やうて二山まに立空へ紙と紙ふくさ紙くれ待へなり

[illegible]
[illegible]

恋十首

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

述懐十首　一首不足

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

無常十首

ちりかゝるせきの音をはゆめならてさすかにきゝし
清水の流にうつる月影と見しをそれかとおもひ
照まさりけむこゝろにしみて夜をこめて何かおもはん
さむしろにあはぬかことをきゝつゝ我とおなしき袖の露かな
そうしのかけにうつりてうきて身のうきこと分けてはなれ
水ひきの池のうちうかへる月のよし野に影うつる
みなと川いさよふ月のしたにありて見ゆるはなかれ
うしろともえんするもさかひ人ありやかへさにとこそ
いのりこし其しるしをはかりてこそ人のかはるは衣
世の中はすゝみ人をこそ恨むらめ我は浮世をいとひける哉

神祇十首

[illegible]十首

めくりあふ月の光を仰きてもかはらぬ契りさえ
むかしにかへるかすみにかゝるも見ゆる

賀茂二首

みたらしやけふすゝしきかけにきてみしめのうち
あふひ草かけてそたのむかけもなき

男山二首

はるかなる岩清水の流れにもとゝめ

[illegible]

熊野二首

みくまのゝ浦にもしほのたれしるらん
わかの浦にうつしてみれは

みかゝみ　二首

神まさと國をさめてそ千敷とみても月まさとみよ千代の
みなす人もさしれ光ありよとあふりそめしも天の文とも

釈教十首

きみこゝろうれしき法のうらみ　三首

渡しもせんたれもけふいひつくらぬをはいまそ見るらん
ひさしくはけふそつきせぬ人の心や世のまよひぬ
もしあらは人のための心みなくへむ経さかりゆるそのひも

無量義経　三首

このひとつこゝろは法ときゝそめし名をかはらぬ法
山桜つかさしらぬもれてそ春をさかそぬれてみる
紅葉ちるもさらにひれてそむまし心あらはれにけり

千手経　三首

むまれては仏にならんし得果てえてこそ来む根しらしそ
らかまそねかん国へもゆくはまれしらまかさらし
さ海くよるみんなるちひとふる光しとのかきはさらぬ

又一首二乃心経

思しいのくらの身ひはへんとしら光あく
たわきもんのあさのいろく菩薩の
もんさうしかれ
の人乃をも光をもとまゝてんせうるさるかな

雑十首

涼しき風の夕をしらぬ月光よるよ此たるもみえあきかたく
よりよそりてむ影みなくゆかしの舟よりしらきさき

156-12
ミy.240

瀧おつるほとおもしろくて此若旦みなん給をさかへ
けふぞ思ひやるかたに都をとほくそ別かひとつはなれ
き海へ遠きなる山もと舟つきて秋の葉さかり
山河のすゑ遠くみゆるに多くはあそひもつれ
山もとの人此中の海にひとつれは風ふきくる浪のたかさよ
月とともにのめハんつゝ花おかめやうつる宿もおもひみて
ほうさき芦への沖をとほく船よりもいそかれなき
なく此泉すいくしてうき世久しくのひとかたのはくる

指定何日面呈
御覧明鑑
大皇帝九五至尊福壽無疆須至陳告者
癸丑年六月初二日